



Title	イタリアと「バレエ」に関する雑記帳 : ballo-balletto-ballet
Author(s)	谷口, 眞生子
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2006, 5, p. 121-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93754
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イタリアと「バレエ」に関する雑記帳

—ballo - balletto - ballet—

谷口 眞生子

1. はじめに

「ダンス」を考える時、バレエというものがその根底にある。（と思われる。）

「ダンス」をこなす人、それも巧くて、ダンスで世の中を渡っていく（は大袈裟であっても、ディレタントとして巧い）為には、「バレエ」を修養していることが条件にある。極論すれば、バレエを経験していれば、主要なダンス（現代における世に知られている種類のダンス）はなんとかなる、と思われる。かなり以前のアメリカ映画であるが、舞台のバック・ダンサーを選ぶオーディションに挑む若きダンサーたちの姿を描いたものの中で、バレエを全く知らずにオーディションに臨んだ女性が、演出家から、すぐに退場するように怒鳴られる場面が描かれている⁽¹⁾。バレエを知らなければお話にならないのである。また、有名な映画『フラッシュダンス』は、バレエ経験のないまま場末の酒場でアルバイトにダンサーをしている18歳の女の子が、自分の夢として、バレエ学校の入学オーディションに挑戦する話である。充分上手なダンサーである主人公はバレエを習ったことがないというコンプレックスがあり、それを克服する為にバレエ学校に入りたい訳である⁽²⁾。

例に出した2本の作品だけでは説得力に乏しいなら、フィギュアスケートの選手たちは、ちゃんとバレエレッスンをこなしている筈である。新体操の選手たちも然り。また、バレエにかなり縁遠い、現在の若者たちによって支持されている、ヒップホップやハウスなどのストリートダンスにも、

パ・ド・ブレ⁽³⁾というバレエから出た技が存在する。様々なダンスに影響のあるバレエは偉大なるダンス — 舞踏、舞踊 なのである。

バレエ関係の書物をばらばらとめくってみる。

「バレエはルネサンス期にイタリアで生まれ西欧で発達してきた。」⁽⁴⁾

「イタリアにおけるバレエの発生」⁽⁵⁾

「イタリアとフランスで徐々に作り上げられ、やがて急速にヨーロッパ各地に、ついで全世界に光り輝くようになったバレエ芸術」⁽⁶⁾

バレエはイタリアが発祥だったのである。それならば、イタリアの舞踊・舞踏について調べるのであれば、バレエは見落とすことが出来ないものである。それではバレエとイタリアの関係の取っ掛けだけでも、というのが本稿である。とりあえず、1400～1600年代のバレエ形成途上とイタリアの関係を整理していく、これが本稿のねらいである。

2. ballo と danza

ところで、少し用語にこだわってみたい。日本語では「ダンス」、「舞踊」と「舞踏」、イタリア語では ballo, danza という語について考えてみたい。「ダンス」を広辞苑で調べると、次のように記述されている。

ダンス【dance】 西洋式の踊り⁽⁷⁾。舞踏。舞踊。

ダンスという言葉自体は広域なものを指せると思う。実際に聞こえる、または聞こえないが踊り手が体で感じる音楽や調子に合わせて踊る、というものがイメージとして取り得る。ところが、舞踏と舞踊については、いまひとつ、明確にイメージが浮かんでこない。舞踏と舞踊の違いは何なの

であろうか。そこで、さらに広辞苑のお世話になってみる。

舞踏 (手の「舞」と足の「踏」とを合わせた語)

舞踊 (ぶよう)。主に明治時代、ダンスの訳語として用いられる。現在は前衛舞踊などで使用。

舞踊 (「舞」と「踊」とを合せた語)

音楽に合わせて身体をリズムカルに連続して動かし、感情・意志などを表現する芸術。ダンスの訳語。

要するに、ダンスという言葉日本語に置き換える時に、どちらも使われることができるのであろう。舞踊の方が、舞踏よりも使われるような意味合いもあるのだろう。舞踊家はいるが、舞踏家はいない。日本舞踊であり、日本舞踏とは言わない。舞踊会よりも舞踏会のほうが用いられる。

そもそもイタリアとバレエが本論の主題であるのだから、広辞苑はこの辺で閉じ、伊和・和伊辞典のほうに移行してみよう。

小学館の『和伊中辞典』(1994)によると、

舞踏: danza, ballo

舞踏会は ballo, 舞踏曲 [場/服] は musica [sala/abito] da ballo

舞踊: danza, ballo

舞踊は、日本舞踊 (danza giapponese) など、民族舞踊に対して用いられるようである。舞踊家は danzatore。

『伊和中辞典』(小学館、1999) でそれぞれの語の定義をみる。

ballo: 踊り、舞踏; ダンス、バレエ; 舞踏会。

danza: ダンス、舞踏、舞踊 ダンス [舞踏] 曲ともある。

ballare

踊る、ダンスする；跳ぶ；（人が）動き回る、じっとしていない、等。

danzare

踊る、舞う。

ついでながら、『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』では、
ballo: 踊り； バレエ

danza: ダンス、舞踊、舞踏曲

踊り、には ballo, danza, 踊る、は ballare である。

舞踏、はなくて、舞踊、には danza と ballo を書いてある。

他の語をみると、フランス語では、danse がダンス、踊りであり、ballet はもっぱらバレエのみに用いられる。danse classique を古典バレエとして
いる。動詞は danser であり、baller は存在しない⁽⁸⁾。ドイツ語は、舞踏と
舞踊ともに、Tanz。スペイン語では、danza, (動詞は danzar) である。

次に、イタリア発行のイタリア語の辞書・辞典類ではどういう記述が
されているかをみる⁽⁹⁾。

簡単にまとめてみると、ballare と danzare は同義語となっている。音楽
や歌のリズムに合わせて動くことである。

ballo は1309年頃に ballare から生まれた語である。ballare はギリシャ語
の「踊る (βαλλε)」からきている。ballo は音楽のリズムに合わせて体や、
特に足での定まった動きのことであり、他には舞踏会の意味もある。また、
「音楽の伴奏を伴った、パントマイムや踊りによる舞台での演技⁽¹⁰⁾」、と
述べられている箇所があり、ここが、伊和辞典で「バレエ」と明確にあら
わされていることとつながるのであろう。

danza は、大抵の場合音楽の伴奏つきで、1人や複数の人々によって、
儀式や審美的、遊戯的な目的で行われる体の動きである、という定義がな
されている。1237年に danzare から生じた名詞である。

ballerino はダンスを職業とする者のことであり、舞台上で踊る人のことである。一方、danzatore は職業的舞踊家もしくは舞踊芸術を行う者、である。ballerino の項目において、danzatore がその同義語である、と添えられている⁽¹¹⁾。

balletto は ballo の縮小形、または音楽に合せての踊りの上演もしくはその楽曲のこともあらわす。さらには、バレエ団の意味でも用いられている。この語は1543年以前に誕生したものとみられている。

danza と ballo はともに「踊り」の意味であり、この点では同義語であるが、ballo のみに「バレエ」と「舞踏会」の意味がある。動詞 ballare と danzare も同義であるが、danzare の方が体全体をつかって表現力豊かに踊るという意味を含み、もっぱら「踊る」としてのみ使われる。一方、ballare は跳ぶの意味、ステップを踏むという意味合いをより前面に押し出しており、さらには別の意味も持つ⁽¹²⁾語である。日本語での「舞踊」はイタリア語の danza にあてはまり、「舞踏」は ballo の方に適合するようと思われる。

3. ballo と balletto

バレエ【ballet フランス】

多くの独舞・群舞によって物語を進行させ、歌詞・台詞（せりふ）を伴わない舞台舞踊劇。14～15世紀イタリアに生れ、16～17世紀フランス宮廷で発達、オペラ中にも採用され、後に音楽伴奏・背景を伴う舞台舞踊として独立した。

この通りである。正しい。しかしながら簡潔すぎるので、さらに細か（過ぎずに細か）く記述していくことにする。

イタリア語の *balletto* は既に見た様に、踊りとしてのバレエ、バレエ音楽とバレエ団の意味を持つが、これは *ballo* に縮小辞 *-etto* を付したものである。この語を文字として最初に用いたのが、グリエルモ・エブレーオ *Guglielmo Ebreo* である。彼は舞踊の技法論を説いたドメニコ・ダ・ピアチェンツァ *Domenico da Piacenza* の弟子である。グリエルモ・エブレーオはミラノ公爵ガレアツォ・スフォルツァに献じた舞踊の書、『舞踊芸術論』 *il De pratica seu arte tripudii vulgare opusculum* (1463年) の中で、バスダンスや舞踏について述べ、個々の舞踏を バッロ *ballo* と呼び、独創的な内容を含む舞踏についてはバレット *balletto* の語を用いた。

イタリア・ルネサンス全盛の1400年代に、舞踊・舞踏論を展開する者や、舞踊・舞踏の教師たちが出現し始めた。上述の2人のほか、アントーニオ・コルナザーノ *Antonio Cornazano* は、1455年に舞踊術についての書物 *Libro dell'Arte del Danzare* をカラブリア公妃イッポーリタに捧げている。彼らはイタリアの諸宮廷に招かれ、舞踊の教師の役割だけでなく、君主が催す、宮廷行事の宴を盛り上げるためのダンスの企画も担当したのであった。舞踏会 *ballo* が催され、踊ることは必要不可欠なものであった。舞踏会は客人をもてなすための恰好の催しであり、宮廷や貴族の館には舞踏会用の広間が用意された。君主が催す舞踏会はまさに儀礼的な社交、外交の場であり、豪華に演出して権力を大いにひけらかしたのであった。また、娯楽や楽しみの場でもあった。

中世においては、イタリアのみならずヨーロッパにおいて上流階級たちの踊りといえば、もっぱらバスダンス *bassa danza* であった。これは男女が手を取り合って足を引きずって歩くように動く踊りであったが、このバスダンスは対照的な速くて跳躍を主とした、もともとは田園地方の踊りであったピヴァ *piva* やサルタレッロ *saltarello* などを取り入れたバッロ⁽¹³⁾、バレットの出現によって消滅へと導かれたのであった。

宮廷をあげての大掛かりな祝宴 — 外国の君主や重要人物を迎えたり、

領土拡大を祝ったり、戦の勝利を祝ったり、特に君主の結婚を祝う目的のもの—では、宴会全体でひとつの大きな劇の筋書きが描かれ、様々な踊りや幕間劇が中に散りばめられた。順に出される食事も、それぞれの食事入場が幕間劇であった。

1490年⁽¹⁴⁾、ミラノのスフォルツァ家で、ルドヴィーコ・イル・モーロが主催する祝祭が行われた。これは『楽園』Festa del Paradiso と呼ばれる宴で、ジャン・ガレアツォとイザベッラ・ドラゴーナの結婚を祝ったものである。レオナルドが大道具と衣装を担当したことでも知られている。祝宴のはじまりにイザベッラが君主に伴われて登場する。スペイン風の衣裳を身に纏ったイザベッラは広間の中央に歩み出て、三人の侍女とともに踊りを二曲、披露する。それが終わるとイザベッラが自分の席に着く。その後、仮面をつけた他の貴婦人たちも踊る。スペイン風やフランス風のダンスも織り込まれていく。そして、これらのバッロは、宴にて上演された劇の合間に行われたものなのである⁽¹⁵⁾。この宴会での食事の入場は、音楽とパントマイムと舞踏での、以下のような、神話を主題としたものであった。

「イアソンとアルゴナウナイとが羊毛をもって出てきて食卓を用意するというパントマイムから始まる。そうすると、ヘルメースに扮装した者が脂多き仔牛を運び来り、アルテミスは鹿の肉を、オルペウスは焼鳥を給仕する。テセウスとアタランテーに扮した者はカリュドン産の野猪を、イシスとニンフは孔雀を、トリートーンは魚を、ヘーベーは果物とチーズをもって出て給仕する。そして最後にアギチウスに扮した者が出てきてこれらの故事来歴を説明する。」⁽¹⁶⁾

また、『楽園』の見世物のメインであった豪華な場面は、回転する天体を表す仕掛けに何人もの詩人が乗り、大公妃（イザベッラ）への賛歌を捧げるものであった⁽¹⁷⁾。

1491年1月24日にルドヴィーコ・イル・モーロとベアトリーチェの婚礼

と、アンナ・スフォルツァとアルフォンソ・デステの婚礼を祝う祝宴がひらかれた。広間は高価な調度品で飾り立てられ、華やかな衣裳で着飾った貴族たちが招待された。彼らはサーラ・ダ・バッロ Sala da Ballo（舞踏会場）に入ると、広間の両側に分かれて着席する。最後に花婿花嫁たちが、フルートが奏でる音楽の中、入場する。さらにフルートの音が高まる中、全員が男女のペアになって踊りに参加する。フランスやスペイン、パンノニア⁽¹⁸⁾を思わせる服装の者もいれば、エジプトやトルコ風の者もいた。この舞踏会は夜が明けるまで続いた⁽¹⁹⁾。

祝宴においては、観客、つまり招待客たちが見守る中で、職業的役者や舞踊家が演目を披露した場合もあったであろうが、一般には宮廷人たちの素人芸であった。見せる側と見る側に分かれ、最後には全員が踊って宴がお開きとなるのであった。

以上見たように、1400年代に誕生したバッロ、バレットは、単に宮廷の祝宴の演目を飾るための踊り、幕間の劇のような舞踊劇、あるいは舞踏会で楽しんで踊るための踊りであった。宮廷に関わる者たちにとっては踊ることが出来るということは宮廷人としての務めであり、裏を返せば、踊りを知らない、ステップを踏めない、ということは宮廷人としてはマイナス要素であったのである。舞踊・舞踏の教師がイタリア各地の宮廷でもてはやされたのは言うまでもないことであろう。

4. メディチ家を介したバレットの変遷

君主の婚礼がらみの祝宴ではメディチ家も負けてはいない。1500年代におけるメディチ家の主要人物の結婚を列挙すると以下のようなになる⁽²⁰⁾。

1539年 コジモ I 世とエレオノーラ・ディ・トレド

- 1548年 カテリーナ・ディ・メディチとフランス王アンリⅡ世
1566年 フランチェスコⅠ世とジョヴァンナ・ダウストリア
1579年 フランチェスコⅠ世とビアンカ・カペッロ
1584年 エレオノーラ・ディ・メディチとヴィンチェンツォ・ゴンザーガ
1586年 ヴィルジニア・ディ・メディチとチャーザレ・デステ
1589年 フェルディナンドⅠ世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌ
1600年 マリア・ディ・メディチとフランス王アンリⅣ世

この縁組ごとに、メディチ家の威信をかけての豪華なる祝宴を挙行了たのであるが、この10組のうちで、バレエの発展と歴史に関与しているのが、カテリーナ・ディ・メディチと、マリア・ディ・メディチである。

カテリーナ・ディ・メディチ

フランス風には、カトリーヌ・ド・メディシスと呼ばれる。彼女は1519年にフィレンツェに生まれた。ロレンツォ豪華王の曾孫にあたる。メディチ家の出の教皇クレメンス七世（1478～1534）の政治策略によって、フランスのヴァロワ家の彼女と同年のオルレアン公アンリ（1519～1559）、のちのフランス王アンリ二世と1533年に結婚し、フランスに渡った。カテリーナは医師、占星術師、おつきの女官たち、薬草学者、舞踊教師や行儀作法の教師、料理人や菓子職人たちとともにマルセイユに上陸した⁽²¹⁾という。1547年のアンリ二世の即位によってフランス国王妃となったカテリーナは自ら舞踊の創作に熱中し、イタリアの舞踊教師たちの助力を求め、自分の子供たちを彼らの手に託した⁽²²⁾ということであるが、その子供たちにはのちのフランス国王シャルル九世やアンリ三世がいた。カテリーナはイタリアの舞踊・舞踏を交えた形式をフランスに持ち込んだ。1572年に『楽園の守り』という出し物があり、これにはシャルル九世と弟たちが自ら出演したのである。これはシャルル九世たちがナヴァール王アンリたちを地獄に落とすという結末を描いた筋書きであった。また、1573年に恐ら

く最初にバレエ balet という語（綴りは現代の ballet とは異なっているが）を使って『ポーランドのバレエ』が上演された。これも政治的な背景を示すもので、カテリーナの息子の一人がポーランド王にと推戴される際に、ポーランドの使節たちをもてなすために行われたものであった⁽²³⁾。大広間に巨大な岩が用意され、雲をかたどった16個のくぼみが彫られていて、それぞれに、フランスの16州を表す婦人や少女たちが入っていた。彼女たちは音楽に合わせて床に降り立ち、ヴァイオリンに合わせて様々なフォーメーションを描いてみせたという。

これら二つの作品を振付け・演出したのが、バルタザール・ド・ボージョワイユー Baltasar de Beaujoyeulx (1537~1587) であった。彼はカテリーナの婚礼の際の随員ではなかったが、フィレンツェ生まれのイタリア人舞踊教師で、フランスに招聘され、王妃に重用された、ボージョワイユーはイタリア名を、バルダッサリーノ・ディ・ベルジョイオーゾ Baldassarino di Belgioioso といい、ヴァイオリンの名手であった。彼は1555年にパリに来て、その後フランス宮廷のバレエのために貢献し、1567年に宮廷の音楽監督と宮廷主席従者に任じられた。彼のもっとも知られている作品が、『王后のバレエ・コミック』 *Ballet comique de la Reyne* である。これは1581年に、アンリ三世の寵臣ジョワイユーズ公爵と、王妃の妹との結婚を祝うために作られ、上演された。ホメロスの『オデュッセイア』に出てくる魔女キルケの物語を題材としたものであったが、これも政治的な含みがあった。このバレエ劇は夜の10時から始まり、宮廷の高官が扮するオデュッセイアが登場し、国王とフランスを讃えながら助けを乞う。魔女キルケが駆けてきて、オデュッセイアが退場、さらに魔女も退場し、その後に歌や踊りが続く、というふうな展開で進み、人間を様々な動物に変身させたキルケが罰せられ、魔法から解き放たれた全員が踊る、で締めくくられる。それから、王と王妃を先頭に皆が踊りに興じ、この催しは5時間半もしくは一説によると10時間かかった、とも言われている。

以上の作品構成から理解できるように、イタリア宮廷の舞踊・舞踏をともなった祝祭劇はカテリーナ・ディ・メディチによって、お気に入りのイタリア人を使ってフランスに輸入されたのである。バレットはイタリアを離れてバレエという名称でさらに発展を遂げていくことになる。

マリア・ディ・メディチ

メディチ家からフランスの王家に輿入れしたもう一人の姫君がマリアである。マリー・ド・メディシスとして知られている。カテリーナの娘の一人がロレーヌ公爵に嫁ぎ、その娘、すなわちカテリーナの孫娘がメディチ家のフェルディナンド一世と結婚したが、そのフェルディナンド一世の兄であるフランチェスコ一世の娘の一人が、マリアであった。フランチェスコ一世の父コジモ一世とカテリーナがまたいとこ同士という親戚関係でもある。

フランスのヴァロワ王朝はカテリーナの息子で終わりを告げ、ブルボン家のアンリ四世が1589年に即位した。マリアは1600年にアンリ四世と結婚したが、アンリ四世は1610年に暗殺され、マリアは息子のルイ13世の摂政となった。ボージョワイユもカテリーナも相次いでこの世を去り（1587年、1589年）、ヴァロワ王朝も消えてしまったが、バレエは終わることはなかった。1589年から1610年までのあいだに八百以上のバレエが作られたという⁽²⁴⁾。マリアもバレエに夢中で、スペインとの結婚政策の勝利を祝して、自分の娘である未来のスペイン王妃エリザベートにはなやかな『ミネルヴァ』（1615）のバレエを踊らせたりした⁽²⁵⁾。

バレエはルイ13世の頃は、イタリアの影響から離れ、勧善懲悪からロマンティックな、メロドラマティックな様相を帯びるようになってきた。1617年に上演された『ルノーの救出』はメロドラマティックなバレエの有名なものであるが、このバレエにはルイ13世、リュイーヌ公爵、貴族たちや市民、道化役者まで参加していた。舞台装置も凝ったもので、山が設置され、機械装置で自転する。すると庭園が出現し、噴水も用意されていた

ようである。騎士道的な神話を主題とするもので、最後の場面で閉じ込められていたルノーが救出されて国王の前に現れ、それから観客も出演者も一緒になって全員で、伝統通りに、イタリア的に舞踏の場面になるのであった。これはフランスではグラン・バレエという名称になっている。すなわち、大舞踏会である。

5. イタリア人たち

メディチ家の姫たちが持ち出したバット、バレットはフランスで大掛かりなスケールをもつ劇作品へと変化していったのに対し、同じ時期にイタリア本国では、各ステップや短い踊り、舞踊音楽について論じられ、また、舞踊家や舞踊教師育成に力が注がれていたようである。1400年代には既に述べたように、舞踏に関する論文が書かれ始めていたが、1500年代も、様々なものが書かれていた。例えば、シメオーネ・ズッコロ・ダ・コロニャ Simeone Zuccolo da Cologna は *La Pazzia del Ballo* (1549年) を著わし、舞踊教師で職業舞踊家 (maestro di danza e ballerino) であったポンペオ・ディオボノ Pompeo Diobono は1554年にミラノに舞踏のための学校を設立した。イタリア中にたくさんの舞踊学校がつくられ、もっとも有名なものはパドヴァのそれであった。ディオボノの弟子が、カテリーナの庇護を受けたベルジョイオーゾである。

ファブリーツィオ・カローソ

カローソ Fabrizio Caroso (1526-1602) は1554年から輝かしい経歴—踊り手、理論家、舞踊教師、器楽演奏家、作曲家—を築いた。また、舞踊教師として、メディチ家に迎えられている。フランチェスコ一世の娘のエレオノーラが結婚適齢期であったため、舞踊・舞踏を習う必要があったのであろう。メディチ家は当主フランチェスコがビアンカ・カペッロと結婚して間もない頃で、カローソはトスカーナ大公妃ビアンカに、舞踏について

の著書 *il Ballarino* (1581年) を献じている。*il Ballarino* —『舞踊家』は二部に分かれている舞踊論で、第一部では、バッロにおいての色々なステップを書き記し、第二部では、様々な種類のバッロやバレットの記述をしている。

カローソはまた、1600年に、*Nobiltà di dame* を出版している。『貴婦人の優雅さ』とでもいう表題である。こちらのほうは1605年と1640年に再版が出され、人気の高さを物語っている。

チェーザレ・ネグリ

チェーザレ・ネグリ (1534～1604?) はカローソと並ぶ舞踊理論家であるが、自叙伝的論文『女神グラツィアの愛』を1602年に出版し、それによって、彼が踊り手としても振付師としてもスター的存在であったことがわかる⁽²⁶⁾。ネグリはアンリ三世の為にアルプスまでも踊って行き、ネグリと40名を越す弟子たちは、ヨーロッパ中の宮廷に散らばり、重用された。

ルイ14世とリュリ

宰相マザラン Jules Mazarin (1602～1661) はブルボン王朝の絶対主義王政を確かなものとしたが、イタリア出身で、イタリア名は Giulio Mazarino であった。彼は政治活動のかたわら、宮廷にイタリア・オペラを移入することに努力した⁽²⁷⁾ が、これはバレエにも少なからぬ影響を与えたのかもしれない。マザランは外交手腕を買われて1640年にパリに呼ばれ、リシュリーの後継者となった。1643年にルイ13世が亡くなり、ルイ14世 (1638～1715) が5歳で即位した。ルイ14世はアンリ4世の孫、つまりはマリア・デイ・メデイチの孫であった。母アンナ・ダウストリアが摂政で、マザランが政治活動に精を出した。幼い王が政治に関与するわけが無い。付け加えるなら、マザランが死ぬ1661年までルイ14世は権力を意のままには出来なかった。王は祖母や父親に倣って、舞踊に励んだのであった。

ルイ14世は幼少の頃からバレエにいそしみ、数々の舞台に出演した有能

な踊り手であった。バレリーノとしての正式なデビューは12歳の時であり、舞踊からの引退は1670年であったが、それまでに、1661年に王立舞踊アカデミーを設立し、舞踊家の育成への環境を整えることをした。ルイ14世は「太陽王」という異名を持つことで有名であるが、これは、ルイ14世が『夜のバレエ』Ballet de la Nuit という大スケールのバレエ劇に出演した時の役どころからきている。『夜のバレエ』は1653年にプティ・ブルボン宮で上演された。田園や都会の夕暮れ、夜の舞踏会、月が支配する夜の神秘的な世界、眠りと夢、の4部構成のバレエであった。ルイ14世は時の役、見物人、明けの明星を演じ、そして最後に馬車に乗った太陽神アポロン役で登場した。

ルイ14世が踊らなくなったのは、太りすぎてみっともなくなったとも、政治に多忙すぎて時間が取れなくなったからなど、諸説があるようだが、ともかくも国王に倣って廷臣達も舞台から遠ざかり、職業舞踊家たちにバレエが委ねられるようになっていった。

ルイ14世の舞踊教師を務めたのがボーシャン Pierre Bauchamp (1631～1705) であった。ボーシャンは芸術家の家系に生まれ、宮廷の音楽家兼舞踊家として仕えた。ボーシャンは上述の『夜のバレエ』にも出演しているが、彼はバレエの5つの基礎ポジションを規定したことで著名であり、舞踏の記譜法を編み出したことでも知られている。ボーシャンは20年にわたってルイ14世の舞踊教師を務めた。

ところで国王の舞踊に大きく関与した人物はもうひとりいた。イタリア人のリュリ Jean-Baptiste Lully (1632～1687) である。フィレンツェ出身で Gian Battista Lulli という名前であったリュリは、修道士から文学とギターを習い、ヴァイオリンを独学で習得し、1646年に渡仏した。一旗揚げようという野心があったのであろう。リュリは王族の館の厨房で皿洗いをするかたわらヴァイオリンを続け、国王のいところに才能を認められ、王妃の楽団に加えられ、めきめきと頭角をあらわしたのであった。1661年に帰化し、1662年に宮廷の楽長ランベールの娘と結婚し、宮廷の作曲家として

活躍し、音楽のみならず、舞踊の踊り手・バレエの振付け・オペラやバレエの演出でボーシャンと並び活躍した。リュリは大酒飲みの道楽者で、欲深い人物⁽²⁸⁾であったらしいが、ルイ14世の宮廷のバレエ熱に大いに貢献したのである。

1671年以降はボーシャンが振り付けし、リュリが音楽を担当し、このコンビは1687年まで続いた⁽²⁹⁾。

6. 結びにかえて—18世紀以降のバレエとイタリア

国王をはじめとしてフランスの宮廷を熱中させてきたバレエはルイ14世の舞踊アカデミー設立によって、宮廷人をバレエ舞台から遠ざけてしまった。代わりに、訓練を受けたプロの舞踊家たちが出て、フランスのみならずヨーロッパ各地で活躍をみせ始めた。興味深いことに、やはり、イタリア人が出てくるのである。

男性舞踊家では、フィレンツェ出身のガエターノ・ヴェストリス Gaetano Vestris (1729~1808) が広く知られている。性格に多少の問題があったらしい⁽³⁰⁾ が、優れた技術を持ち、1782年までパリのオペラ座で活躍した。フランス人バレリーナとの間に出来た息子アウグスト（オーギュスト）Augusto Vestris (1760~1842) も有名になった。ガエターノはその母親や兄弟姉妹もバレエに従事する、バレエ一家の出であった。

女性舞踊家も輩出してくる。イタリア人として最も有名なのが、ポアントゥで初めて踊ったとみなされたこともある⁽³¹⁾ マリア・タリオーニ Maria Taglioni (1804~1884) である。彼女もバレエ一家の出で、父親のフィリッポ (1777~1871) は振付師としてヨーロッパ各地で活動した。女性舞踊家、つまりバレリーナでイタリア出身者はタリオーニの他にも色々といったが、イタリアで活躍というよりも、フランスや他のヨーロッパ都市でもてはやされた。

このほか、振付けの分野では、フィレンツェ出身のアンジョリーニ

Gasparo Angiolini (1731~1803) が活躍している。

イタリアで宮廷舞踏会のもとにバッロ、バレットは、フランスへ移行して宮廷バレエとして完成し、さらには、宮廷から離れて動いていった。フランスの次はロシアにおいてバレエがさかんになり、かいつまんで言えば、アメリカに取り入れられて変化をみせ、全世界において現代の舞踊に何らかの影響を与えていると思われる。

ところで不思議なのは、イタリア人振付家や舞踏家が顕著な活動をみせたのに、何故イタリアがバレエの中心地にならなかった、なれなかったのだろう。

100年ほど前の例をあげれば、エンリコ・チェッケッティ Enrico Cecchetti (1850~1928) はバレリーノとして活躍した後、ロシアに招聘されてロシアバレエの育成に力を注いだ。晩年はミラノのスカラ座でバレエの指導にあたったが、イタリアに対しての貢献よりもロシアに多大なる貢献をしている。イタリアが踊り手の育成をしなかったわけではない。伝統ある舞踊学校から、優秀な人材が出てきているのだ。振り付けや演出の分野でも否定的なものはない。バレエへの第一歩は確かにイタリアであったのに、それが発展して主導権をとることが出来なかったのである。イタリアは統一国家になるのが遅かった、ということも関連するのであろうか。あるいは、イタリア人とフランス人の気質の違いだと言い切ることが出来るのであろうか。環境や風土、政治状態も絡んでくることなのであろうか.. . と色々雑多なことが気に掛かる。

本稿ではバレエの初期段階までを概観したが、イタリアとバレエ、イタリアの舞踊・舞踏を考えるとますますイタリアが不甲斐なく、また、イタリアが謎めいたものに思えてきて仕方が無い。今回は大雑把な、取り留めのないものになってしまったが、今後はもっと様々な要素を、細かく突き

詰めて考察していきたい。

注

- (1) 映画『コーラスライン』A Chorus Line、1985年。監督：リチャード・アッテンボロー、主演：マイケル・ダグラス。
- (2) しかしながら、『フラッシュダンス』での例の面接で踊るシーンでは、結局彼女を馬鹿にしていたような古臭い先生たちが彼女に圧倒されることになる。つまりはバレエを知らなくても踊りに説得力がある、彼女のダンスは認められたということか、またはバレエをさらに習得すればもっと磨きがかかるということか。さらに言えば、主人公の女の子は、雇い主で恋人になった男性の力でバレエ学校の面接に挑むのである。バレエ経験ゼロを記入した願書では面接を受けられなかったということであり、やはりバレエはものを言うのであろうか。
- (3) フランス語のカタカナ読み。原語では、pas de bourrée である。バレエの基本ステップのひとつである。ただし、ヒップホップやハウスのパ・ド・ブレの動きは微妙に本家バレエのそれとは違う。
- (4) 村山久美子『知られざるロシア・バレエ史』東洋書店 2001 p.3
- (5) ツアハリアス『バレエ 形式と象徴』美術出版社 1965 p.184
- (6) マリ＝フランソワーズ・クリストゥ『バレエの歴史』白水社 1970 p.7
- (7) 広辞苑に文句をつけることにはなるが、西洋式の踊り、というのはどうかと思う。例えば、インドの伝統的な舞踊は、日本ではインド舞踊とか、インドダンスと呼ばれている。インドは西洋ではない。和製英語といえはそうかもしれないが、英語では、Indian Dance と言っている。他の踊りについても添えれば、アジアの端やアフリカの地方で盛んであるベリーダンスは、西洋式のものではない。
- (8) 『Le dico 現代フランス語辞典』白水社 1993による。
- (9) ここでは2種類の伊伊辞典を参考にした。lo Zaingarelli 2005 及び、Il dizionario della lingua italiana per il terzo millennio である。
- (10) lo Zanichelli 2005 での記述である。
- (11) lo Zanichelli 2005 にそうあるが、De Mauro の方にはそうは書いていない。
- (12) 揺れ動く、動き回る、など。
- (13) バッロは alta danza もしくは danza saltata o librata であると1400年代の舞踊理論家たちに定義づけられている。(Tani, Storia della danza, p.1383)
- (14) 1490年1月13日のほか、1496年6月20日説もある。
- (15) Padovan, La danza alla corte degli Sforza, p.81
- (16) 邦正美『舞踊の文化史』p.101 原文のまま掲出した。

- (17) 薄井憲二『バレエ 誕生から現代までの歴史』p.8
- (18) ドナウ川とサーバ川の間にあった古代ローマの属領。現在のハンガリーのあたり。
- (19) Padovan, op.cit., p.86
- (20) Solerti, *Musica, ballo e drammatica*, prefazione を参考にしたが、カテリーナ・ディ・メディチの結婚年が誤りではあるが、そのままにした。
- (21) Leonardo Castellucci, *Sorbetti e gelati*, Fiesole 1995 p.14
- (22) クリストゥ『バレエの歴史』p.12
- (23) 薄井憲二『バレエ 誕生から現代までの歴史』p.8
- (24) クリストゥ 前掲書 p.18
- (25) クリストゥ 同上書 p.18
- (26) レイナ『バレエの歴史』p.20
- (27) レイナ 同上書 p.61
- (28) リュリは困窮にあえぐ詩人が持っていた「オペラ・アカデミー」開設の特許権を買い取ったり、競争相手が上演出来なくなるような特許状—リュリの許可なくして何人も二個以上の歌曲や楽器の伴奏を持ついかなる演劇も禁ず、という内容—を得て、1672年から彼の死までフランスの全土に音楽の支配権を揮った。これは「強欲」の好い例であろう。
- (29) 1687年にリュリが死に、ボーシャンは引退している。
- (30) 自らをプロシャ王やヴォルテールと並ぶ三大偉人の一人だと豪語していたらしい。
- (31) 最初の人物はイタリア人のアマリア・ブルニョーリであるらしいが、確かではない。
(薄井憲二 前掲書 p.59)

主要参考文献

- 薄井憲二『バレエ 誕生から現代までの歴史』音楽之友社 1999
- 邦正美『舞踊の文化史』岩波新書 1968
- 古田徳郎、竹内昭一『バレエと音楽』音楽之友社 1959
- マリ＝フランソワーズ・クリストゥ著、佐藤俊子訳『バレエの歴史』白水社 1970
- フェルディナンド・レイナ著、小倉重夫訳『バレエの歴史』音楽之友社 1974
- ゲルハルト・ツアハリアス著、渡辺鴻訳『バレエ 形式と象徴』美術出版社 1965
- Maurizio Padovan, *La danza alla corte degli Sforza in Leonardo e gli spettacoli del suo tempo*, Milano 1983
- Paolo Raponi, *Fabrizio Caroso e il ducato di Sermoneta nel XVI secolo*, in *La danza italiana tra Cinque e Seicento*, Roma 1997

Angelo Solerti, *Musica, Ballo e Drammatica alla Corte Medicea dal 1600 al 1637*,

Arnaldo forni Editore 1989

Gino Tani, *Storia della Danza dalle origini ai nostri giorni*, Firenze 1983